
学校の七不思議殺人事件

KMY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校の七不思議殺人事件

【Nコード】

N4059N

【作者名】

KMY

【あらすじ】

中学2年生の長瀬学は、ある日は永長読に告白される。しかし、その日は”運命の日”だった。長瀬の友達が七不思議になぞらえられて次々と殺される。そして長瀬によって明かされる意外な真犯人！一体犯人は誰なのか？あの5人はなぜ殺されなければいけないのか？

問題編 #1（前書き）

*これは、KMYblog(<http://d.hatena.ne.jp/kmyblog/>)に掲載された妄想「学校の七不思議殺人事件」を一部修正したものです。

問題編 #1

カッシャーン。

白い骸骨は倒れ、真つ二つに砕けた。

それを恐懼の目で見下ろしているのは、一人の生徒。

はっと辺りを見回す。誰もいない。

第二理科室は、閑としている。科学部で一体何をやったのか、焦げ臭い匂いはしたが、部活が終わってから20分も経過しただけに、人影はない。

理科室に6つ設えられている黒いテーブルには何も載っていない。後ろの棚には実験器具や薬品がある。黒板も、きれいに消されている。ただ、骸骨が壊れて床に倒れているだけであつた。

彼女は、誰も見ていないのを改めて確認すると、理科室から駆け去つた。

初夏のある日の薄暗い夕暮れのことであつた。

ここは熊本県一ノ谷市立一ノ谷中学校。2年2組の教室。

騒ぐ生徒たちの声が絶えないその教室に、静かな足取りで先生は入ってくる。

教壇に立つた神田進先生かんだすすむは、どんと出席簿を叩くように置き、元気に手を叩く。

「はい、皆さん、席について。出席を取ります。まずは井伊君」

そう言つて出席簿を開いた先生は、「はい」という返事を聞き取るとチェックをつけていく。

「今日は・・・やっぱり田代君がいないですね、それでは一つだけ皆さんに聞きたいことがあります」

隣の席の男子と話していた少年、長瀬学ながせまなぶは、それを聞いて先生を見る。

「今朝、理科室で骸骨が壊れているのが見つかりました。誰か知っ

ている人がいたら、後で職員室に来て下さい。怒りませんので」

そう言っ先生が教室から出て行くのとすれ違いに、田代清輝^{たしろせいき}が息を切らして教室に入ってくる。

「まーた遅刻かよ」

長瀬の右隣の北条木陰^{ほつじきようすき}が、吐き捨てるように言う。

「ごめん、また寝坊して」

そう言っ田代は、長瀬の後ろの席に座る。その田代の右隣の奥^{おく}田祐仁^{くたゆうに}が、ぼそっと北条に言う。

「科学部副部長には骸骨のこと言わないほうがいいよ」

「骸骨がどうしたって？」

田代に聞かれていたようである。

「壊れたのよ」

奥田のそのまた右隣の羽生^{はせ}がおるが、そう言った。

「何言ってんだよ」

奥田が慌てて言うが、田代は構わず立ち上がって奥田に怒鳴り付ける。

「何だよ、お前が壊したのか！」

「落ち着いて！」

羽生の前の席の是永長読^{これながはよ}が、制止に入る。

「ふん」

田代は鼻を鳴らす。椅子に座る田代の後ろの川野輝間^{かわのてるま}が、クスクス笑っている。それを聞き付けて、田代は激上して椅子が倒れるほど勢いよく立ち上がる。

「何がおかしい！」

「いやあ、ちょっと七不思議のことを思い出してね」

「七不思議？」

是永の右隣に座っている竹井美香^{たけいみか}が、不審けに言う。

「あら、美香知らないの？」

羽生が尋ねると、竹井は小さくうなずく。

「あのね、七不思議の1つに、夜に骸骨が学校を歩き回るというも

のがあるのよ。ええと、何番目だっけ」と是永。

「3番目」と、竹井の後ろの長谷川玲子。はせがわれいこ

「ふーん、で、他に何があるの？」と竹井。

「1番目」

不意に後ろから声がしたので竹井が振り向くと、そこには菅野久人。すがのひ

「校庭の隅に森があるだろ？そこに旧日本兵が住んでいて、森に近づいた人を殺して食べている」

「ぎゃーっ！」

竹井が怖がると真面目な顔をしていた菅野はゲラゲラ笑い出す。

「2番目は何だっけ」と北条。

「体育館の中で毎晩バスケットボールの練習をしている男の子がいる。なんでも大会当日に学校に来る途中、事故で死んだらしい」

田代の後ろの川野が言う。

「そろそろ座れよ田代」

川野の勧めに、田代はぶんすかとした顔で座る。

「そう言えばお前、毎朝一人でバスケの練習やってるだろ」と北条。

「ああ、あれを怖がってみんな朝はやりたがらないんだな」

川野はため息をつく。

「その男の子と目が合ったら死ぬんだってさ」

「ぎゃーっ！」

竹井の悲鳴。怖がっているというより、楽しんでいる様子である。

「で、3番目は何だっけ」と是永。

「・・・さっき言った」と長谷川。

「てへっ」と、べろりと舌を出した是永の前の席の中沢聡子なかさわさとこが言う。

「4番目は、この校舎の4階と屋上の間の階段の段を数えたら、上りと下りで違うというもの」

その話に、長谷川の後ろの三ツ矢梢みつやしずえが割り込む。

「そして5番目。この学校の4階に昭和天皇からもらった壺があるんだけど、実はあれはレプリカで、本物は玄関に飾ってあったけど

一人の生徒がこれを割っちゃったの」

「えーっ！で、その人どうなったの？」

竹井が椅子から身乗り出す。

「倒れるわよ」と羽生が注意すると、竹井は長谷川の机に手を置いて小柄な体を支える。

「首を吊ったの。そこに霊が出るんだって。校長先生が壺のレプリカを作って4階に祀ったら、今度は4階に出るようになったの。それで4階には誰も寄らない」

三ツ矢が黒く笑いながら言ったので、竹井は悲鳴を上げる。

「あまり大きな声を出すなよ」と、菅野の隣の井伊正輔^{まごすけ}。

「で、6番目は？」と竹井。

「昔、屋上から飛び降り自殺した生徒がいて、今も窓から見るとね、落ちているときのあの顔がね、見えるらしいのよ」

羽生が楽しそうに言う。

「ぎゃー！で、7番目は？」

「全部知ったら死ぬだろ」

奥田がつっこむ。

「あはは」

竹井は笑って、隣の是永を見る。是永は、顔を真っ赤にしてうつむいていた。

「長読？」

「あの、知ってる？」

是永はそつと竹井に耳打ちする。

「言っちゃいなよ」

竹井がそう促すので是永は思いつきり立ち上がって、さつと長瀬を見る。

「あの、長瀬君」

「何？」

「あの、明日の朝早くに、あの木のところまで、来てくれませんが」
教室はざわつとなる。

「そ、そんなの、ここでもいいだろ」と長瀬は慌てた様子。

「うっん、あの」と是永は口ごもる。

「どうしたの？この変な空気」と井伊が菅野に尋ねる。菅野は小さな声で言った。

「1番目の七不思議には続きがあつて、あの森には幹が赤っぽい木があるだろ？その木の下で告ると必ず実るらしい」

その日の夜。長瀬は、ベッドで横になっていた。

眠れない。全然眠れない。

何だよ。

是永の奴が変なことを言うから眠れないじゃないか。

もう一回目を閉じる。

寝付けない。

布団の先を手で引っ張る。

「くそっ！」

もどかしくなつて、長瀬は体を勢いよく起こす。

ふと、窓から夜空の月を見た。憎いくらいに明るく輝いていた。

同じ月に照らされて、その人は幹が赤っぽい木に凭れて人を待っていた。

「来てやったぞ」

その人の許に来たのは、菅野である。

「どうした？言つとくけど俺は」

そう言う菅野の腕に、黙って注射器を注す。

「・・・えっ？」

菅野は、そのままくんと膝をついて仰向けに倒れる。

それを見下ろして、その人の不気味な笑い声が響いた・・・。

問題編 #2

「学」

一階からの母の声で、長瀬は目を覚ます。掛け時計を見る。5時21分。

早えーよ。そう突っ込みたい衝動を押さえて、眠い目を擦りながら着替えて一階のキッチンへ下りる。

「もう、ママ、起こすの早すぎるよ」

「何いってんの、今日は友達が来ているのよ！あんな早く来るなら前もって教えなさいよ！」

母は少しイライラしている。

「えっ？」長瀬は驚く。

長瀬が支度を済ませて玄関に行くと、そこには是永が立っていた。
「是永」

是永の小柄な体、ぶにとしたその表情、しかもこの人が自分に告白と来る。

「な、何でわざわざ呼び出しにくるんだよっ」

長瀬は必然的に顔を真っ赤にした。

「ごめん、無理矢理呼び出して」

是永は頬を赤らめてうつむく。

「いくら何でもこの時間は」

「じゃ、あの、うん、あのっ、一緒に行こう」

是永は長瀬を無視してしどろもどろにそう言い、長瀬に右手を差し出す。

「あのな、是永・・・」

長瀬は顔を真っ赤にしてしばらく考え込んでいたが、歩き出す。

「あのっ、手は」

是永が長瀬の後ろから尋ねるが、長瀬はきこちなく首を横に振る。

「いや、いい」

是永は終始黙ったままである。長瀬も、恥ずかしさからそんな是永に一声もかけられない。

2人ともお互い黙ったまま、校門の前まで来てしまう。

早朝であり、さすがに校庭には全く誰もいない。いるとしたら、校庭の隅っこにある、登校下校の人には決して見向きもされない、かの小さな木の集まりくらいだろうか。

そのうちの一本、幹の赤っぱい木の下に立って、是永はやつと口を開いた。

「あ、あの」

一番低い枝でも人の身長を少しばかり越えているような、大きな木である。初夏ということもあり、葉も元氣よく繁っている。

しかしその木には見向きもせず、是永はただうつむいていた。長瀬もどきどきして、是永の頭のつむじばかりを見ていた。

「好きです、長瀬君のこと」

是永のそれは、非常に小さな声であつた。

6時34分。

2人の次に教室に来たのは、羽生であつた。

「あら、長瀬君に北条く・・・あれ」

羽生は自分の席に荷物を置くと、長瀬とその右隣に座っている是永の前まで回る。

「今日は早いね」

「お、おはよう」

そう言つて是永は、机の下にぶら下がっている長瀬の右手をぎゅっと握る。それを見た羽生はにっこりして、「じゃあ私は生徒会に」と言つてそのまま教室を出ていく。それとすれ違いに、奥田が入る。

「よう」

「おはよう」

奥田と長瀬がその言葉を交わすと、是永はさらに強くぎゅっと長瀬の手を握る。

「おはっ、あつ珍しい、今日は早いんだな」

井伊が教室に入ると、是永はいきなり立ち上がり、長瀬の頭をぎゅっと抱きしめる。

「私の、私の長瀬君は渡さないんだから」

「井伊男だぞ」

長瀬の冷静な突っ込みに、井伊は笑い出す。

「あはは、こいつは傑作だ」

他の生徒たちも続々と入って来るが、三ツ矢が2人の前に来たと、是永の緊張は頂点に達する。

「私の男は、誰にも渡さないっ!」

そう言って椅子に座っている長瀬を抱き押し倒す是永を、周りはくすくす笑いながら見ていた。

「お、おい、是永」

「今から私のこと、長読って呼んで」

「落ち着けて!」

「やた」

そう答える是永。周りの雰囲気になえられなくなり、長瀬は怒鳴る。

「もうお前なんか嫌いだ!」

周りはしんと静まり込む。

是永は顔を真っ赤にしてぼろぼろ涙を流してゆっくりと立ち上がって、そのまま教室を駆け出してしまう。

周りの冷たい視線が、床にあおむげになっている長瀬に降り注がれる。

「あれ・・・僕のせい?」

「当たり前だろ」

後ろから、隣の席の北条の声。

「今すぐ謝って来いよ」

長瀬は、しばらくの間固まっていた。

長瀬は廊下に出ると、すぐさまそこを歩いている生徒を掴まえて尋ねる。

「是永、知らない？」

「あっちに行った」

「ありがとう」

東側へ歩いて行くと、端の図書室の入口の手前に階段、そしてトイレのドアが並んでいる。長瀬は、とりあえず階段を下り始める。2階には1年生と3年生、3階には長瀬ら2年生の教室があり、2年生は何かという下に行くことも多いのである。

一方、さつき長瀬がスルーした3階の女子トイレの中では、羽生が手を洗っていた。

ポケットから取り出した紫色のハンカチで手を拭い、自分の長髪を撫で、さてトイレから出ようとドアノブに手を触れた矢先。

ドアが勢いよく開き、是永が真っ赤な顔で泣きながら、3つあるうち一番奥の個室に駆け込む。

「長読！」

羽生もびっくりして、その個室を開けようとするが開かない。鍵がかかっている。

「何があつたの、長読！」

しかし聞こえるのは是永の泣き声ばかり。

ドアを叩こうとして羽生はぴたりと手を止め、そのままトイレから出る。同時に階段のほうから長瀬が走って来たので、叫ぶように長瀬を呼ぶ。

「長読、泣いてるよ！このトイレで」

「えっ」

長瀬は慌てて、トイレに入ろうとする。その服を引っ張り、羽生が一言。

「ここ、女子トイレよ」

長瀬はため息をついてドアの隣の壁にもたれる。

「ちよつと見てみるね」

長瀬にそう言っただけで羽生は、トイレに入ってゆく。長瀬は、羽生を見守ることしかできなかった。

羽生は、ドアのすぐ横の窓にぼんともたれ、ドアの向こうの人に話しかける。

「長瀬がいるよ」

しかし個室の中から聞こえるのは泣き声ばかり。

「長瀬が、謝りたいって」

「うつつ・・・、頑張ったのに」

羽生は微笑してそのままトイレから出てドアを閉める。

「あのぶんじゃ泣き止みそうにないわね、HRまで待ったら？」

その言葉に長瀬は唇をかむ。不安そうな顔つきをしていたが、羽生が「見ていてあげるから行って」と言うと「じゃあ僕がここにいるから羽生は行って」と譲らない。

「長瀬が長瀬の顔見てまた泣いたらどうするの」

長瀬はそれを聞いてしばらくしてから、その場を去った。

結局、是永が羽生とともに教室に来たのは、HRの2分前。是永は席に座る前に、北条を隔てた席に座っている長瀬に微笑む。

「ごめん、私がやりすぎた」

そう言っただけで、座る。北条がぼんと長瀬の肩を叩く。

「よかったな」

「うん、おーい長瀬、僕も悪かった」

長瀬の謝罪に、是永はにっこりと手を振る。

その直後に、田代があらい息をついて教室に入ってくる。

いつも遅刻した時も平然とした顔をしている田代であったが、この時は違った。

顔が真っ青。手が震えている。

穏やかな教室の雰囲気は一変した。生徒らは、一気にそちらに注目する。

「死んで、る……」

しばらくの沈黙の後、田代がやっと口を開く。

「どうした？ 田代、落ち着け！」

井伊が叫ぶ。田代は戦々恐々とした顔で続ける。

「菅野が、死んでる」

生徒らは騒ぎ出した。

「静かにしなさい」

田代の後ろに立った、背の高い透き通った神田先生の声。生徒らは先生の次の声に注目したが、発されたそれは平凡であった。

「何かと見間違えたのですね、田代君、座りなさい」

田代はさらに語気を強める。

「本当です！ 俺、見たんです！ 菅野が、あの日本兵の森の前で死んでいるんです！」

「それが遅刻の言い訳ですか」

先生がそう言うと、教室からは一時の沈黙の後、どつと笑いが起こる。田代は、もうどうにでもなれと叫んで、教壇を一蹴りして席に向かう。それを見とがめるように田代を睨んで、先生は出席簿を開く。

「田代は昼休みに職員室に来なさい。では出席を取ります。井伊君」

「はい」

出席取りも進んで行って、川野の番になった時。

「川野ー、休みですか？ 全く連絡もなしにうちのクラスは……」

神田先生は愚痴をこぼしながらも続ける。

「今日は……川野君と奥田君と菅野君がいないですね」

ため息をつきながら出席簿を閉じた先生は、教室から出て行ってしまう。

「おい田代」

長瀬が、後ろにいる田代を向く。田代はまだ震えている。

「お、俺は違うんだ、菅野がメールよこすからいけないんだ」

「何があった？」

北条が尋ねる。

「今朝さ、7時過ぎに菅野からメールが来てさ、用があるからあの木の下に来てってさ、で行ってみたらさ、あのさ、た、倒れて・・・」

「落ち着いて、先生来てるわ」と羽生。見ると、いつの間にか英語の先生が教壇に立っていた。

問題編 #3

女性で保健体育の松嶋先生は、いつも通りの青いジャージを着て、1年2組が騒いでいる体育館の隅に座って出席簿の表紙をぼんやり眺めていた。

と、生徒らの間で悲鳴が上がったので、顔を上げる。

西の壁に3つある緑色のドアのうち真ん中のドアに生徒らが集まっていた。

松島先生は、嫌な予感がしてそちらに行き、生徒らの人垣を掻き分ける。

「うつ・・・！」

先生は、思わず口を手で塞いだ。

そこでは、真ん中の倉庫のドアの中では、2年生の川野が、体操服を着て白目をむいて、腰と膝を曲げた姿勢で横になっていた。

1年1組は、運動場に集まって、別の先生の指示を受けていた。

ふと、生徒の一人が運動場の隅にある木の集まりを指差して言う。

「あそこにあるもの、何だろう」

「遠くて見えない」

「こら、整列中は静かにしなさい」

「先生、あそこに人が倒れています」

突如、一人の生徒が手を上げる。先生もそちらを見て、「あら本当、大変、ここで静かに待っていないさい」

やがて先生は、しゃがんで「大丈夫ですか」と聞き脈を見て、ぴたりと手が止まった。すぐに後ろに向かって「今すぐ教室に戻りなさい」と叫ぶ。

そこには、田辺の言葉通り、菅野が横たわって死んでいた。

職員室。

「一ノ谷署の是永清太です」

是永刑事は、刑事手帳を先生らの前にかざす。

「で、生徒たちはどうしましたか」

「1、3年生は帰しました」と刑事のそばに立っている校長先生。

「どうしてそのような判断をされたのですか？」

「死んでいるのはいずれも2年生でして」

校長があたふたして頭を下げると、是永刑事は「困りましたね」とため息をつく。

1階の会議室。黒板に対して長机がU字型に二列ずつ配置されており、また黒板の手前には一列置かれている。2年生たちは、1組は窓側、2組は廊下側に並んで座った。

会議室の前に立っている是永刑事は一連の自己紹介を終えた後、机の上の資料を手取る。

「ではまず、菅野久人、川野輝間とあまり話していない人は手を上げなさい」

そこにいるほとんどの人が手を上げる。「ここで嘘をつくと犯罪ですよ」と刑事が言くと、田代が手を下げた。

結局、その場に残ったのは、長瀬、是永長読、田代、北条、竹井、井伊、羽生、長谷川、中沢、三ツ矢の10人のみになった。

竹井が、会議室の隣にある面接室から戻って来る。

「次、誰が行く」

竹井の言葉に、ただでさえ静かであった会議室はさらに静かになる。

長瀬はふと、隣に座っている是永が、机の上の自分の手に手を乗せていることに気付く。

「怖い」

是永が短く、震えた声で言うと、長瀬は席から立つ。

「大丈夫だよ、是永」

自分を見上げている是永の瞳を見て、長瀬は赤面する。

「それじゃあ、ね」

長瀬は、逃げるように会議室から出て行ってしまう。

すると、是永のそのまた隣の羽生が、是永に一言。

「あまりにも人前でべたべたしているとまた逃げちゃうわよ」

「分かってる」

是永はうつむく。と、羽生の隣に座っている、天井をぼんやり眺めている長谷川が、つぶやく。

「朝霧」

その言葉に真っ先に反応したのは、田代であった。いきなり立ち上がって怒鳴る。

「その名前は今言っな！」

「うるさい」と、長谷川は椅子の下のカバンから本を取り出す。

面接室は狭いが、それでも黒いソファ12つとテーブル1つが向かい合うだけのスペースはあった。

是永刑事の向かいに座った長瀬は、緊張していてなかなか顔が上らない。

「君、将棋強いんだって」

見知らぬおじさんである刑事からのこれである。長瀬は目を丸くして、かばつと顔を上げる。

「あなたはもしかして」

「長瀬の父です、娘がよく長瀬の話をしていました」

「是永が・・・」

刑事はにつこりとした顔でテーブルの上の資料を取ると、それにさつと目を走らせて続ける。

「さて、あなたは菅野さんと川野さんとはどういう関係にありましたか」

「ただの友達です、よくみんなで遊園地に行ったり」

「そうですか、話は変わりますけど、あなたは今日の6時半か

ら7時までの間、どこで何をしていましたか」

「はい？」

長瀬が驚いた顔を見せると、刑事はため息をつく。

「まだ先生からもさっきの人　竹井さんでしたっけ？まだ聞いていないようですね。実は　、先ほど奥田祐仁さんの遺体が発見されました。その死亡推定時刻がさっきの6時半から7時までの間でしたので、それを聞いているんですよ」

長瀬は絶句する。

「いや　あの、僕は是永　長読と一緒に教室にいましたが、その後長読と喧嘩をして、長読が出て行ってしまったので、それを追いかけていました」

「それを証明する人は？」

「井伊がいたと思います。時間は覚えていませんが、長読が教室を出て行ってからは、後輩に長読がどこに行ったのか聞いてから、すぐに2階に行ったので、後輩は僕の顔を覚えていると思います。その後はトイレで羽生と会ったので、これでその時間は全部他の人と一緒にいることになると思います」

「そうですか　」

刑事は胸のポケットの手帳にそのことを書き込む。

「私の娘のことをどう思っていますか」

いきなりこんな質問が飛び出したので、長瀬はたじろぐ。

「はい？」

「隠さなくてもいいんですよ、そういうところは分かっているんですから」

刑事の急ににこにこした顔を見て、「はい、今朝告白されました」と長瀬。

「それは、さっき言った例の木の下ですね」

「はい」

「本当にあの時菅野さんはいなかったのですか」

「はい」

「そうですか」

刑事はその旨を手帳に記す。

「もう、構いませんよ」

刑事がにっこり。

「はい」

長瀬は、少し緊張が残っていると見えて、立ち上がる時一瞬よろめく。

ドアのところに行つてドアノブに手をかけたその時。

「ああ、質問がもう一つありました」

後ろからの刑事の声。

「何でしょうか」と長瀬が振り向く。

「旧日本兵の『旧』という漢字と言えば、誰を思い付きますか」

長瀬はどきつとしていた。ノブに触っている手も震えている。緊張で集中力が高まったことも一因にあるのかもしれない。

「それは・・・ダイイングメッセージか何かですか」

長瀬が勇気を振り絞つて尋ねると、刑事の「そんな感じですね」という返事である。

ドクン、ドクン。長瀬の心臓の音が大きくなる。

唇を噛んでから長瀬は、「いえ、知りません」と笑いながら言つた。

「分かりました」という刑事の返事と同時に、長瀬は面接室を出る。目の前には、廊下の流し台があった。

嘘だ。

これは何かの間違いだ。あの人が犯人である訳がない。

そつだ、あれはただの考えすぎなんだよ。

長瀬は自分にそう言い聞かせてこくりと頷く。無理に笑顔を作る。それでも手は震えていた。

「奥田も殺されたらしい」

会議室に戻つた長瀬が真つ先に言ったのが、これである。ただで

さえ静かであった会議室は、どんよりとした空気が支配する。

「次は誰が行く？」

会議室に戻った長瀬は、ドアの前でこう聞く。

「私が行く」と言っただのは、是永。

是永が会議室から出て行ってから長瀬は田代の隣の席に座る。

「質問だけど、いい」

「何だよ」

大柄で眼の鋭く輝いている田代に、長瀬はさらに聞く。

「菅野を見つけた時はどんな様子だったの」

「何でそんなことを聞くんだ」と田代。

長瀬は、周りを一瞥してから答えた。

「犯人は田代がよく遅刻するのを知っていてあそこに菅野を置いておいた。それに毎朝必ず練習している川野もあの体育館で殺した。つまり、犯人はあの3人と馴染みの深い人ってことになる」

「何で体育館で死んだって分かるんだよ！」

田代が怒鳴ると、「落ち着け」と井伊がたしなめる。

「昨日、先生があ理科室の骸骨が壊れたって言っていた」

長瀬がそう言ってちらりと会議室の後方を見る。そこに座っている神田先生が頷いている。

「あれは3番目の七不思議で、田代が菅野を見つけたあの木のところは1番目。僕たちには川野も殺されたとか聞かされていないけど、話の流れからして2番目である体育館で殺したと思う」

「ふん、どうせ後で刑事に言っし、今言う必要はないだろう！」

田代はそう突っぱねて、大きなあくびをした。

「・・・もし犯人がこの中にいるとしたら」

長瀬の言葉で、その会議室中に戦慄が走る。

問題編 #4

田代は激昂して、長瀬の襟を掴む。

「いい加減にしろよ、これは警察の仕事だろ！」

「もしいきなり目の前で友達が捕まったら、田代は信じてくれるの？」

田代は、うつと言葉に詰まる。長瀬の襟を掴んでいた手を離す。

「私、長瀬に協力する」と、傍らの竹井が手を挙げる。

「このまま警察に任せたら、いきなり友達が犯人って言われても納得できないと思う」

「ありがとう、竹井」と、長瀬がにつこり。

周りの人たちは、お互いの顔を見合わせる。

「俺も賛成だ。どうせ警察は、子供には心理的負担が大きいか変な理由をつけて、あまり具体的に説明してくれないだろうし」と、井伊。

「自分たちでもきちんとけりをつけたいわね」と、羽生。長谷川も、黙って手を挙げる。

「僕も賛成」と、三ツ矢。

「その僕、何とかならないの」と、中沢も手を挙げる。

「さて、残りはお前だけだ」と、北条。

「うつ、うるさい！」

田代がそう叫ぶと同時に、ポケットの携帯電話が鳴る。それを取り出して操作していた田代は、いきなり顔を真っ青にしてばたと携帯電話を閉じる。

「おい、長瀬」

「何？」

「今朝、菅野から、面白いものを見せるからあの木を揺さぶって来いってというメールが来たから揺さぶったら、上から落ちて来たんだよ」

「そのメールが来たのは何時ごろ？」

「7時過ぎだ」と言つて、田代は立ち上がる。

「し、しっかり刑事に伝えろよ！」

田代は動揺しているようである。

「どこ行くの？」と、羽生。

「トイレ、漏れそうなんだ」

田代はそう言つて、走つて会議室を出る。

「あのメールは犯人が送つたものだとする」と

長瀬が独り言のようにつぶやいていると、会議室に是永が、ゆつくりとした足取りで入つて来る。

「どうしたの？」

「あつ、是永、終わったんだ」と、長瀬。

「うん、で、次は誰が行くの」

是永がにつこりとそう言つと、三ツ矢が「僕が行く」と言つて、会議室を出て行く。

是永は長瀬の隣に座つて、尋ねる。

「何の話をしていたの」

「いろいろあつて、僕たちで解決できないかなつて」

「犯人を知つたら、警察がいきなり発表するよりもショックを受けるかもしれない」と、神田先生。

「詳しくは説明できませんが、僕には警察よりも早く見つけなければいけない事情があるんです」と長瀬が反論する。神田先生はため息をつく。

突然、どこから携帯電話の着信音が聞こえてくる。

「誰？」

みんなは辺りを見回す。

「あわ、あわ、」

是永が慌てた様子で椅子の下のカバンを持ち上げて携帯電話を探している。着信音が鳴り止むと同時に是永は携帯電話を取り出して操作する。

「えっと」

「どうした」

井伊が尋ねると「田代君からメールが来ました」と是永。

「見せて」

長瀬が言つと、是永はばつと携帯電話の画面を長瀬に見せる。田代からのメールで、内容は「大切な話があるので4階に来てください」。

「勝手に行くのは」と長瀬。

「ちよつとだけなら大丈夫、うん、安心して」と是永は言つて、携帯電話をポケットに入れてそのまま会議室を出て行ってしまう。

それを見届けて、長瀬は立ち上がる。

「先生」

「何ですか」と神田先生。

「菅野の死亡推定時刻を教えてください」

「それはできません」

「言える限りの情報、みんな言ってください。奥田は階段で殺されましたよね？」

神田先生は、大きく目を開く。

「それは、この私でも初耳です」と、神田先生。辺りはざわつとなる。

「おい、長瀬！どうして奥田が死んだって分かるんだよ」と井伊が長瀬の肩を押さえる。

「まだ断定はできないけど、奥田もおそらく七不思議になぞらえてどこかで殺された。菅野が1番目、川野が2番目、昨日の骸骨が3番目だとすると、奥田は4番目の屋上手前の階段。違いますか？」

神田先生は黙っていた。長瀬はさらに言う。

「まだ5番目と6番目がある。僕の勘が正しければ、この連続殺人はまだ終わってなんかいません！」

「大人には、子供の戯言に付き合う義務はないのですよ。こんな場面ではなおさらです」

神田先生はそう言ってため息。

「そこをなんとか」

「もうよしとけよ」

井伊が後ろから肩を叩くと、長瀬は握りこぶしを机にぶつける。

「くそっ」

その時、またもや電話の着信音が鳴り響く。

「あつ、俺みたいだ」と、北条がポケットからそれを取り出す。

「っ」

そのメールの内容で北条は顔を真っ青にして立ち上がる。

「ちよつとトイレ」

「北条？」と、長瀬。

「うつん、おなかが痛いだけ」と北条が言つと、長瀬は立ち上がった。「僕も一緒に行く」

「駄目だ」

井伊が長瀬の横に立つ。

「どうして？まだ田代も是永も戻って来ていないんだよ」

「長瀬」

井伊は一呼吸置いて続ける。

「お前は俺たちの知らないことを知りすぎている。洞察力があまりにもありすぎる。だから心配なんだよ」

長瀬ははっとして、周りを見回す。友達が自分に向けている視線は、冷ややかだった。

「な？これ以上お前の身の回りで何かが起きたら、犯人にされる立場なんだよ」

「うつ」

長瀬は舌を噛んで、どすつと座る。

「安心しろ、俺が行く」と、井伊は北条を連れて会議室を出て行ってしまう。

「くっ・・・」

うつむいている長瀬の隣に座ってきた竹井は、長瀬の背中をさす

る。

「大丈夫、あたしは疑っていないから」

「竹井」

長瀬は、顔を上げる。

ん？そういえば、犯人はどうして1番目と2番目を後回しにして3番目だけを先に実行したんだろう。長瀬がそう思っていると。

「次は誰？」と、三ツ矢が会議室に入ってきて来る。

「じゃあ」と、羽生が手を上げて席を立つ。

羽生が行ってしまつと、三ツ矢は廊下側の席に並んで座っているみんなの反対側である窓側の席に座つた。

「梢」

竹井が慌ててそちらに駆け寄る。

「梢、いきなりどうしたの」

「竹井」

三ツ矢は、隣に座ってきた竹井をじろじろ見る。

「どうしたの」と、竹井。

「ほつといてあげなよ」と、中沢。その隣の長谷川は、黙って本を読んでいる。

「静かに」と、三ツ矢が手を叩くと竹井はびくつと反応する。

「これは刑事から聞いた情報だから」

三ツ矢の言葉に、みんなは息を呑む。

菅野の死亡推定時刻は午前2時ころ。死因は毒によるもの。半袖のシャツには、何枚かの葉が付着。

校内には防犯カメラがあつたが作動は5時以降で、問題の木には一組の男女と田代と見られる人以外誰も近寄らなかつた。また、いずれも人の体ほどの大きい荷物を持っているようには見えなかつた。川野は体育館倉庫の中のバスケットボールの箱のそばで発見。死因は菅野と同じ成分の毒による発作、またボールの箱の蓋に前もつて毒針が仕掛けられていた。死亡推定時刻は6時半頃。いつも川野がバスケの練習を始める時刻である。

奥田は屋上手前の階段の最頂段で発見。五寸釘を心臓付近に刺すことで返り血を軽減したと見られる。また倒れていた奥田は、死亡寸前に漢字の「旧」を書いて右手で隠していた。死亡推定時刻は、6時半から7時までの間。

「どうしてそこまで詳しく聞けたの」

竹井がぞくつとしながらも尋ねると、三ツ矢はうつむいて立ち上がる。

「よい子は、今はまだ知らないほうがいいよ」

そう言っ、ちらと長瀬を見る。長瀬は、うつむいていた。

「ちよつとトイレに行きたいわ」

中沢がそう言っ立ち上がると、長瀬が一言。

「できるだけ複数で行動したほうがいいよ」

「何でよ」と、中沢。長瀬は立っ、勢いよく放つ。

「4階に行こつ、5番目と6番目が危ない」

三ツ矢は、にこつと微笑む。

それと同時に、窓の外に何かが落ちた。

会議室の窓の外には25メートルくらいの幅の灰色のコンクリートの地面が沿っ続いていて、その3段の段差の向こつにはグラウンドがあり、火だるまになつたそれはコンクリートの地面に落下した。

「!？」

みんなは思わず、そちらを見る。

問題編 #5

玄関から飛び出してそこに駆けつけたみんなが見たものは、まもなく燃え尽きようとしていた黒焦げの人の体。ガソリン臭い。

「いやあああああつ！」

中沢の悲鳴。警官も続々集まってくる。

長瀬は上を見上げる。真上の4階の教室の窓が開いていて、そこから井伊が呆然とした顔を覗かせていた。

「あそこだ！」

長瀬は上を指差した。

警察よりも早く4階に駆け寄ってきた長瀬と竹井は、廊下を見て絶句する。1つの教室のドアの隣の、2メートルくらいの高台のすぐ下に、壺の破片が散らばっていた。そしてそこには、北条がうつぶせに倒れていた。

「北条！しつかりしろ！」

長瀬が何度も北条の体を揺さぶるが、北条からは何の反応もない。

「北条は死んでる」

と、高台の隣のドアを開けた井伊。

「井伊！」

「女はそれ以上来なくていい」

井伊はため息をついて竹井を見る。長瀬はその井伊を押し退けて教室の中を覗きこむ。空き教室とはいえ、机は整然と並べられていた。と、空き教室の隅っこに、うつむいて座っている是永の姿があったので、竹井は叫ぶ。

「長読！・・・もしかして井伊君が」

「違う」

井伊は、開いている窓のほうを指差す。

「犯人なら、死んだよ。安心しろ。俺が来るのが思ったより早すぎ

て、是永は殺しそこねたみたいだ。これが遺書だ。是永の前に落ちていた」

井伊が差し出したそのワープロ書きの3つ折りのA4サイズの文書を、長瀬と竹井は読む。

中身は簡潔だった。おとといの晩に骸骨を壊してしまったのは自分であり、それをあの菅野、川野、奥田、北条、そして是永の5人に見つかって告げ口されるか不安になって、自分が理科室を使う科学部の副部長であることも関係して殺したこと、殺してから自分がやったことの重大さに気付き自殺する旨が記されていた。そして最後に「田代清輝」の署名。

「田代君が、まさか・・・」

竹井は口を手で塞いで、そのまま膝をつく。長瀬は黙って、井伊の肩を叩く。

「井伊、ちょっと来てくれ」

その廊下には、警官が続々と集まって来ている。廊下の東端の窓にもたれて、井伊はため息をついて警官の活動のさまを眺めている。「まさか田代が犯人だったとは」

「違うよ」

その隣にもたれた長瀬は、言う。

「えっ」と井伊は、長瀬を向く。長瀬は、うつむいていた。

「遺書をワープロ書きにするということは、筆跡を隠すことだよね？僕にはそれが、本物の”遺書”だとは思えない」

「まさか俺を疑っているのか」と、井伊。

「それより、是永はどうした？」

「薬を飲まされたみたいで、寝ている」

「そうか」

長瀬はため息をついて井伊を見る。

「大丈夫。僕は井伊を疑っていない」

「えっ」と、井伊は目を見開く。長瀬は続ける。

「犯人は見えた。あとは動機とアリバイ崩しだ」

「北条がメールで死んだはずの菅野に呼び出されて、怖がるので俺がついていくことになりました」

先の面接室で、井伊はソファに座って、向かいの是永刑事に話していた。

「どうしてその時に警察に言わなかったのですか」

「俺達の中では、まだ菅野が死んだことを信じたくないという気持ちがあったと思います」

「そうですか」

「その後、4階のあの壺のところに行って、菅野に返信しました」

「誰の携帯からですか？」

「北条の携帯からです」

「それで？」

「北条があの壺の真下に来たら突然壺が落ちてきて、北条はすぐ避けたけど足に当たって、うめき出したので毒が塗ってあると思いました」

「それから？」

「すぐに静かになったので、壺がタイミングよく落ちたということ
は中に犯人とか仕掛けとかがあると思って、ドア（引き戸）を開けようとしたのですが開きませんでした。ドアのあの白く曇っているガラスからは、何か赤っぽいものが窓から落ちたように見えて、それで」

「どうやって教室に入れたのですか」

「壺のすぐ左のドアは開かなかったので、壺の右のほうのもうひとつのドアを開けました。後で長瀬が来たときにも見たのですが、中から鍵がかかっていたんです」

「教室に入って、どうしたのですか」

「まず、窓の外を見ました。田代っぽい人が下ですごく燃えています。すぐその床に是永が座っていたので起こしましたが、起こ

してもすぐに眠ってしまいました」
「そうですか」

みんなのいる会議室に、井伊は戻った。是永は保健室に行っていて、いない。中沢と話をしていた長瀬が、井伊を見ると尋ねる。

「どうだった」

「さっきと同じことを言った」

井伊はそう答えて、長瀬の隣の椅子に座る。

「で、そっちは？」

「いきなりだよ」

長瀬は半笑いである。

「菅野の件は、もう読めたけど」

「えっ？分かったのか？」

井伊が目丸くする。

「どうやってお前と是永が行ってから田代が来るまでの間にあそこに死体を仕掛けたのか分かったのか？」

長瀬はうなずいて、次に「黙ってる」と続ける。

「北条と田代が死んだ時、ここを出たのは、刑事の話を含めて、まず竹井」

「うん」

長瀬の前の席に座っている竹井がうなずく。

「次に僕が、その次は是永が行った」

「うん」と、井伊の相づち。

「田代が携帯で誰かに呼び出されて出た後、是永が戻って三ツ矢と交代したけど是永もすぐに出て行って、その後北条と井伊も出て行った後三ツ矢が戻って羽生と交代した。その後、中沢が出ようとしたら田代が落ちてきて、みんなそこに集まった」

「となると、一回もここを出ていないのは長谷川と中沢だけか。その順番と、会議室があ教室の真下にあることが関係しているのか？」

「さあ。でも刑事と話した人はアリバイがあるし、それ以外は全員出て行ったきりだし」

と同時に、会議室に是永が入って来る。

「是永、大丈夫か！」

長瀬が立ち上がったて叫ぶ。

「ううん、大丈夫。睡眠薬飲まされていただけ。これからお父さんのところに行かなくちゃ」と、是永。少しげっそりしている様子である。

「是永、田代に何かされたか？」と、長瀬。

「殺すって言われて、睡眠薬飲まされて、うん」

是永はふらりとバランスを崩したが、すぐに壁にもたれた。

「井伊君の声が聞こえて、その後は覚えていない」

「そっか、じゃ気を付けろよ」

「ふふっ、学君こそ」

少々寝ぼけた様子で是永はそう答えて、廊下に戻る。

「俺と北条が思ったより早く来たから殺せなかったんだ。それにしてもまだ眠いのに呼び出されるなんて可哀想だな」と、井伊。

「刑事は娘のことが心配なんだよ」

長瀬はそう答えた後、ぼんやりと天井を見上げる。

「是永は後でいいとして、今のうちに奥田殺しのアリバイを確かめよう」

井伊がそう言うと、長瀬は頷く。

「はい、はい、はい！」

竹井が楽しそうに手を上げる。

「不謹慎よ、美香」と羽生。

「ごめん。で、何時から何時までの間だっけ？」と、竹井。

「6時半から7時までの間だよ」

長瀬がそう言うと、三ツ矢が「川野のことはいいのか？」

長瀬は答える。

「川野は、犯人が前もって作った仕掛けで殺された、いわば自動殺

人みたいなものだから。じゃ、竹井」

「うん、6時55分くらいに登校したけど、私はいつもバスを使っているし、登校には最低でも10分はかかるから無理なんじゃないかな。お母さんもいたし」

「そっか、竹井は完全に成立だな」と、井伊。

長瀬は、ちらとみんなの顔を見回す。自分の友達が、よりにもよってあの人がこの連続殺人をやったのけたなどと、自分でもまだ信じたくない。でも、それは顔には出さないでおこうと、そう決めた。「羽生は？」

「私？6時50分頃まで、生徒会室で生徒会長と話をしていたわ。話が終わってから、3階のトイレに行ったらいきなり長瀬が入ってきたの。あとは長瀬が見てきた通り」

「それじゃ、次、中沢」

「竹井と同じようなものよ。歩いて行った方が早いし、そもそも家を出たのは7時過ぎだから」

「長谷川」

「6時40分、家を出る。歩いて、50分に学校につく。玄関で三ツ矢と挨拶する。それから後はずっと図書室で一人」

「で、三ツ矢は？」

「僕も長谷川と同じくらいの時間に学校に着いて、その後は教室で友達と話していた。ああ、来る途中にあのトイレの前に長瀬がいるのが見えた」

「是永を除くと、これで全員か」

長瀬はそう言って、ちらりと井伊を見る。

しばらくして。

「なあ井伊、動機に心当たりはないのか」と、長瀬。

井伊は、答えた。小さな声だった。

「そつえばさっき長谷川が・・・」

それから少しして、会議室には永刑事と永が戻って来た。警官も3人ほど、神田先生と教頭先生、校長先生もいる。

「このような事態になってしまい」

校長は刑事にたじたじである。

是永が井伊の隣に座ると、刑事は持っていた手帳を読み上げる。

「犯人である田代清輝は自殺しました。遺書には、昨日理科室の骸骨を壊したのを菅野、川野、奥田、北条、是永の5人に知られて気が動転したと書かれています」

刑事の顔は悲しそうである。

「田代清輝の遺体には、数センチのロープの燃え残りが付着していて、そこからガソリンが検出されました。あの教室でライターでロープに火をつけてから窓の外で首を吊ったものと思われます。ライターが窓の下に落ちていました。ロープはどこかに輪っかになるように結めば、ロープが火で切れた時に一緒に落ちます」

刑事はそこまで読み上げてため息をつく。

「すみません、それ以上子供の前で読むのは酷だと思えます」

会議室の後方の机に座っている神田先生が手を上げて立つ。刑事は無理に笑顔を作って、続ける。

「そうですね、それでは子供には帰ってもらって・・・」

「待ってください」

長瀬が立ち上がる。

「刑事は、何かを隠している。違いますか？」

刑事は、黙ってばたと手帳を閉じる。

「黙りなさい」と神田先生が言うが、長瀬は構わず続ける。

「田代は自殺なんかではありません。真犯人は、必ずこの中にいます！」

「黙りなさい！」

神田先生が怒鳴るが、隣の校長がその手を叩いて「君こそ座りなさい」

長瀬はポケットから携帯電話を取り出すと、長机の隙間を抜けて、

会議室中央の、長机に囲まれた大きなスペースに出る。

「今から、田代の携帯にメールします」

長瀬はそう言っ、携帯をかちかち操作する。

「まだ分析中ですが、田代清輝の携帯電話は、菅野のものと一緒に燃やされてしまった筈です」

是永刑事がそう言っ、長瀬は首を横に振る。

「確かに田代の携帯は燃やされたかもしれませんが、でも、ある方法を使えば、この世からいなくなった人にさえメールを送ることができるのです」

長瀬はそう言っ、目の前の友達に携帯の画面を見せる。

「井伊、宛先は誰だと書いてある？」

「確かに田代だよ」と、井伊。長瀬は携帯を引き戻すと、送信ボタンを押す。

「送信しました。皆さん、今すぐメールを確認してください」

長瀬がそう言っ、直後に着信音。

井伊がポケットから携帯を取り出す。

「井伊、どうだ？」

長瀬が尋ねると、「来ていない」と井伊は答える。

「中沢は？」「来ていないわ」

「こんなやり取りが続いた。」

「さて、後はあなただけですよ」

長瀬が振り向いて言っ、たその人は、答えた。

「来ていない」

「えー、では皆さんに届いていないようですので、もう一回送ります。これで着信音がしたらすぐに分かりますよね？」

長瀬はそう言っ、もう一回携帯を操作する。

直後に、また着信音。

鳴った。その人の携帯のイルミネーションも、見事に青色を出している。

みんなは、一斉にその人を見る。

その人は、手をがたがた奮わせて、携帯を握って、画面を見ていた。

” 新着メールあり From：長瀬 学 ”

「まさか」

井伊が、その人の真つ白になった横顔を見る。

長瀬は一呼吸置いて、その人を指差す。

「学校の七不思議になぞらえた連続殺人をやったのけた真犯人は、あなただ！」

問題編 #5 (後書き)

次回から解決編です。

解決編 #1

「そんな」

その人の隣の席の羽生は、目を丸くして驚いている。

「このメールの仕掛けは、簡単です。田代のものとしてあなたのアドレスを登録すればいい。そうすれば、こっちの携帯では田代宛のメールに見えてしまう。あなたはこの原理を応用して、あの時ここで、田代本人が持っているはずの携帯からメールが来たと僕に思い込ませたんだ。違いますか？ 是永長読さん！」

長瀬は携帯をばたんと閉じて、ポケットに詰める。

「あの時、携帯を取り出す時に慌てたふりをしたのは、あの着信音が実は、起動音だったから。そう考えればつじつまは合うんだ。最近の携帯は指定した時間に自動で起動する機能があるし、起動音として着信音を設定すれば完璧だ。そして、前もって自分の携帯に入れておいたメールを誰かに見せればいい」

「待つて」

是永は、何のことやら分からないというにこつとした顔をして、立ち上がる。

「学君、私がやる訳ないでしょ。だいたい、奥田君が死んだのはいつですか？」

視線を父に向ける。

「奥田祐仁の死亡推定時刻は6時半から7時の間です」と、是永刑事の返事。長読は続ける。

「そうでしょ？その時間は、ずっと学君やかおると一緒にいたんだもの。アリバイは完璧じゃないの。それに菅野が死んだ時だって、あの木の下で告白、したでしょ。うん。あの時から田代君があそこに行くまでずっと誰もいなかったでしょ？木の上に人がいたら普通気づくでしょ？それにあたしのことは学君自身が見ているでしょ？そうお父さんと話したんだから。私のアリバイは完璧でしょ？ね？」

私にあの二人は殺せるの？」

「できるよ」

長瀬のあっさりした返事に、是永は目を丸くした。

「是永は、大胆にも僕へ告白したことそのものをアリバイトリックに使ったんだ！」

「えっ！」

「そんな！」

周りから驚きの声上がる。

「川野は、三ツ矢も言った通り、前もって仕掛けを作って殺したんだ。そして菅野は、防犯カメラの動いていない夜に何だかんだである木の下に無理矢理呼び出して、殺した。殺した後、あなたはあの木の上に死体を隠したんだ。あの木はよほどのことがないと誰も来ないことを利用して！」

「そんな！あの木の下で告白とかしたでしょ？あの時気づかなかったでしょ？」

そう言う長読に、長瀬はため息をつく。

「あの状況じゃあ誰も気付かないよ。だって是永が近くにいるし、恥ずかしかったし。早朝に僕を無理矢理家まで呼びに行った理由もこれ。死体を木の上に置いただけでは自然に落ちるかもしれないから早めに済ませたかったんだ。死体の上に吊り上げるなら、木の枝を支点にしてロープでできる。違いますか？」

長瀬がそこまで言うのと、是永はくすくすと笑い出す。

「あはは、私って、あの、ずっと学君やかおるのそばにいたんでしょ？菅野君は百歩譲って私が殺したとして、奥田君はどうすればいいの？」

こんな時でも長読は、頬を赤らめている。

「確かにその時間教室では僕と一緒にいたし、トイレでは羽生と一緒ににいた。でも、教室からトイレに行っている間の是永は、誰も見ていないんだ！」

「そっか、さっき私たちに聞いたのはそれだったのね」と、竹井。

「どういうこと？」長読が竹井を向く。

「是永が刑事と一緒にここに来るまで、みんなに是永を見たかと聞いて回ったんだ」と、井伊。

「そう、そしてこれが僕を登校時間ギリギリに呼び出した2つ目の理由だよ。是永は人が少ないうちに、トイレに行くふりをして誰もいない4階を通って、前もって屋上に呼び出しておいた奥田を殺した」

「そんな」と、羽生。

「途中で誰かに見つかつてはいけない。まさに薄氷を踏むトリックだったけど、是永は見事にそれをやってのけた。もちろん誰かに見られたとしても、田代が自殺さえすれば誰も何も言わなくなる。万が一言われたとしても、田代に全てなすりつければいい。是永はそう計算した」

長読はさすがに、体が震え始めた。長瀬は続ける。

「でも、先を急ぐかあまり、是永は奥田のダイイングメッセージを見逃したんだ」

「ダイイングメッセージ？」

「そう、奥田は即死ではなかった。死ぬ間際には是永の名前、長読^{ハヨ}を片仮名の血文字で書いた。でも手が震えて、この2つの文字はくっついて漢字の旧に見えたんだ」

「そんな！それは奥田君のなにかの見間違いでしょ？そ、そうだ、これは全部田代君がやったから、そう考えれば北条君が死んだのも」

長瀬は手をぐつと握る。

「北条も田代も、是永が殺したんだ。まず、刑事との話が終わって会議室に戻る間に菅野の携帯から田代を呼び出す。死んだはずの人からメールが来て、しかもそれが脅迫めいた内容だったら、誰にも言えない」

「」

「そしてさっき言ったトリックで田代からメールが来たふりをして、最後に田代を気絶させて携帯を取り上げて、田代を呼び出した時よ

り柔らかい表現で北条にメールを送る。そして、北条と目撃者役が来るからくりだった。警察を呼んだら殺すとかつけて、ね」

「それで俺の前で、どうやって壺を落としたんだ？あの台座は揺れたりしなかった」と、井伊。

「あの壺の下にロープを敷いてあったんだ。しかもたあのロープではない。輪っかになっていて、もう片方は窓の外で田代の首を吊っていたんだ」

「あつ！」井伊が思わず声を上げる。それでもなお長読は、笑顔を崩していない。

「そして、前もって田代の体と一緒にガソリンを塗っておいたロープに火をつけて、ガソリンを入れた袋や田代、菅野の携帯もろとも田代のポケットに入れておく。火をつけたら輪のロープは切れて、落ちる時に壺の下にロープも田代の重みで引っ込む。バランスを崩した壺が落ちるといふ仕掛けだ」

「なつ　　」井伊が目丸くする。

「そして是永は、井伊が驚いて教室に入るまでの間に、睡眠薬を飲んで寝た。恰も井伊が来るのが早すぎて田代が殺し損ねたかのよう」

「ふふつ　　」

長読は、真つ白な顔をして笑っている。

「今まで学君が言ってくれたことは全部状況証拠でしょ？つまり他にも可能性があるということ。本当に田代君が殺したかも知れないでしょ？じゃあ物的証拠はあるの？」

「あるよ」

長瀬がそう言うのと、長読の顔から笑みが引く。

「あの時僕に見せたメール、既に消したとしても携帯会社に記録が残っているはず。もし見つかったら、田代ではない携帯からは永に田代を騙ったメールを自分に送って、是永があ現場に行く理由を作ったという証拠になりうる」

長読はうつむいた。唇を噛んで、手をがたがた震わせている。さ

っきの笑顔とは反対側の、鬼のような形相。

「どうして、この学校では夏でもあまり話題になっていない七不思議になぞらえたの？」と、竹井が尋ねる。

「七不思議には順番があるのを利用して、北条と田代を呼ぶ時にさらに怖がらせるためじゃないかな。警察もそういうのには無関心の様子だったし、何かになぞらえていることなど七不思議を知らない警察は聞きようがない」と、長瀬。

「ははっ」

突然、長読が笑い出す。

「そうだよ、あの5人を殺したのは、このあたし」

そう言って、長読は顔を上げる。その顔は、笑っていながらも、それでも恐ろしいものであった。

その雰囲気の中で、三ツ矢が尋ねる。

「長読、どうしてあの5人を殺したんだ？僕にはまだ信じられない」

「信じるも何も、去年自殺した友達のこと、覚えている？」

長読がそう言くと、周りはざわっとなる。是永刑事は、手で顔をふさぐ。

「朝霧かれん」

長谷川が短く言う。長読は手をぎゅうつと握って、続ける。

「あの5人が殺した朝霧は、あたしの実の妹だったのよ！」

解決編 #2

「えっ？」

長瀬は目を丸くして、長読を見つめる。

「あたしとあたしの妹　かれんは、6年前まで同じ屋根の下で幸せに暮らしていたの」

そうして、ぎっとそこに立っている刑事を睨む。

「お父さんの浮気がばれるまでは、ね　！」

刑事は、唇を噛んでうつむいている。

「何でこった」

井伊が思わず声を上げる。長読の手は、怒りで震えている。

「小学3年生の時、あたしのお母さんとお父さんは離婚したわ。あたしはお父さん、かれんはお母さんのところに行ったわ」

長読の目から、ぼろりと涙が滴り落ちた。

「小学校は別々のところに行って、親同士の仲も悪くてかれんとはなかなか会えなかったけど、中学校がたまたま一緒になって、嬉しかった。毎日のように、一緒に話したり遊んだりした」

「それで仲がよかったんだ」と、竹井。

「浮気したお父さんと、その愛人とはなにか付き合い辛くて、かれんだけがあたしの心の支えだったの。でも、去年の10月に、かれんは家で首をつって死んだ。あたし、信じられなくて」

そこまで言うてから、長読は目を大きく見開いた。敵を全て倒さんとする、獣の目だった。

「かれんが死んだのを信じられなくて、何日も悲しんだ。学校に行けなかった日もあった。でも、ある日、あたし、知ってしまったの。あのかれんと特に仲がよかったあの5人が話しているのを陰で聞いてしまったの。かれんが死んだ責任を、お互いなすり付けあっていた」

長読はそこまで言うてから一回深呼吸をして、次に椅子の下の子

ンク色のカバンを長机の上に置いて、そこから一枚の写真を取り出す。目からは、涙が大量にあふれていた。

「たまたま持っていた携帯電話で写真を撮って、それをプリントもして、あの５人に見せてやったわ。そうしたら、今度は録音していないだろうなどと言ってきたわ。自分さえよければ、追い詰められるまで白状しないあの５人が憎かった。あたしの唯一の心の支えを、あの５人は奪った。許せなかった。殺すしかないと思ったの」

長読は、涙で真っ赤に染まった顔で、長瀬を見る。

「ねえ、許せると思う？あの５人を　そして、もう一人」

カバンから突然、きらつと光るナイフの刃を覗かせた。それに長瀬が気づく。

「かれんがあの５人のせいで苦しんでいるのを、助けてあげられなかった姉のあたし！」

かばつと速く鋭い両手でナイフを握ると、それを勢いよく自分の首に向ける。

「最後の犠牲者は、このあたしよ！」

「やめろ！」

後ろの席の井伊が叫ぶ。

血。

血が、吹き出た。

井伊が左手で、長読の首を塞いでいた。

「くあああああつ！」

左手を傷した井伊が叫び声を上げる。

「井伊！是永、やめろ！」長瀬が必死に叫んで、飛びかかろうとする。

会議室の隅と隅にいた数人の警官が走ってきて、長読を取り押さえにかかった。

「いやあああああああああ！」

長読の叫び声が、こだました。

「ここかな」

一ノ谷市総合病院、306号室の前。長瀬は部屋の番号を何度も確認して、引き戸をゆっくり開けた。

部屋の右と左に2つずつ並べられているベッドのうち3つは空っぽで、残る左窓側の1つに井伊がいた。

「井伊」

長瀬がそちらに行つて井伊のベッドの隣の椅子に座ると、井伊はにこつと笑顔を見せる。

「誰かと思えば、長瀬か」

「どうなったかなと思つて、さ」

「うん、化膿とかはないし、今日か明日には退院できるって」

「でも、左手はしばらく使えないんだろ」

長瀬が言つと、井伊は白い布団の下に隠していた、包帯に包まれた左手を見せる。

「あの5人にとっては、後味の悪いことになってしまったな」

井伊がため息をつくと、長瀬はえつとなつて尋ねる。

「どうということ？」

「あれ？長瀬、知らなかったのか？」

井伊は、不思議そうな顔をした。

窓からは、夏の陽がやさしくやわらかく差し込んでいた。

”朝霧家之墓”

そう書かれている墓石を見つけると、長瀬はその前で静かに手を合わせて、目をつぶる。

しばらくの沈黙の後、ばちりと目を開けた。

そうして、帰ろうとして右を向いたとき。

そこに、深緑の和服を着た一人の女性が立っていた。

あまりにも唐突だったので長瀬はびっくりして倒れそうになる。

「あら、かれんのお友達ですか」

その女性の声。

「あれ？」

長瀬は、その人の顔を見上げる。それは長読の父と似て、どこか悲しそうだった。

「はい、朝霧、かれんは、僕の友達の妹でして」

長瀬はそこまで言ってから、しまったと口を手で塞ぐ。

女性も、さらに悲しそうな顔をする。

視線が、明らかに下に行っている。

「そうですか、長読は、是永長読は、今どうしていますか？」

「いいえ、元気ですよ」

長瀬には、それしか答えられなかった。

「分かっていますよ。連絡はいただきました」と、女性。

長瀬はどきつとして、どうしたらいいのか分からず複雑な表情でうつむく。

「そうですか」

「心が痛みます」

「そうですよね」

「かれんが死んだのは私のせいですから」

「はい？」

長瀬は、女性の顔を見上げる。

是永刑事の手引きで長読と面会ができたのは、事件から1週間後であった。

一ノ谷署。長瀬は、薄暗いコンクリート壁の部屋に入る。その部屋は、透明なガラスと腰くらいの高さまでのコンクリートで仕切られており、そのガラスの向こうには中央に座っている長読とその部屋の隅に警官が一人。

長瀬は、長読の向かいの椅子に座り、ガラス越しに長読に尋ねる。

「どう？ここでの暮らしは」

「ふふ、冷やかに来たの？あたしのやったことは少年犯罪の中でも悪い方だし、未成年でも死刑になることだってあるし、あた

しは」

長読は、笑った。その笑顔からは、どこか虚しいものを感じた。

「長読、冷やかして来たんじゃない。本当のことを話そうと思って来た」

「えっ？」

長読は驚いて顔を上げる。

「まず、あの5人は別に朝霧をいじめたり恨んでいた訳じゃない。むしろ、あの5人は全員、朝霧のことが好きだったんだ。5人はお互いの気持ちに気づいて、お互い朝霧を奪い合っていただけなんだ。先週長読が言った責任のなすり付け合いも、その奪い合いの延長線だと思う」

「そんな、それじゃあ、かれんはどうして死んだの」

「それがさ、離婚した後お母さんが連れてきた男が暴力的で、それに耐えられなくなったらしい」

「そんな」

「お母さんの方は我慢して、最後まで朝霧を守ろうとしたらしい。

朝霧も、お母さんが苦しんでいるのを見て長読に心配をかけられなかったと思う」

「それで、その男は？」

「朝霧が死んでちよつとしてから別れた」

「うっつ」

長読は、手で口を塞ぐ。目から涙が流れ落ちる。

それは頬を伝って、ぼたりぼたりと落ちていく。

「あたしって、バカよね。あの5人が死んで、彼氏もできて、一石二鳥だと思ったのに、何てことをしてしまったんだろう。ふふっ、こんなあたし、嫌いになっちゃったよね」

長読が泣き止むのを待って、長瀬は切り出した。

「長読、そのことなんだけど。今度は僕の方からお願いするよ」

「えっ？」

「長読、僕と付き合ってほしい」

「えっ」

目の周りの涙を手で拭った長読は、頬が真っ赤であった。それは、決して涙の腫れではなかった。

「確かに長読は取り返しのつかないことをした。でも、僕は普通に帰った長読が好きだ。長読が帰ってきたら、その時は2人でいるところに行こう。だから、長読も希望を持って！」

警察署から出た長瀬は、出口横の自動販売機の横のベンチに座っている是永刑事を見つける。

「刑事」

是永刑事は、ため息をつく。

「私はもう刑事じゃない。辞表なら、とっくに出した」

「えっ、なぜ」

「なぜ、じゃない。私は、娘のために尽くしてやれなかった。先週、初めて娘から睨まれた。こうなってしまったのは、全部浮気した私のせいだ。相当我慢していたんだろう」

「是永さん」

長瀬は、そんな一人の大人の横に座る。

「奥田が死んだときのあのメッセージを見て、とっくに気づいていたんですね」

そう長瀬に言われて、是永はうつむく。

「ああ、そこに娘の名前が書いてあるなど私にはとても信じられなかった。結果として、北条君や田代君も私が殺したようなものだ。娘とは言えもうちょっと警戒しておくべきだった。私は父親としても刑事としても失格だ」

それに長瀬は、答える術はなかった。

しばらくの沈黙の後、刑事がぼやいた。

「かれんも死んで、あの娘にもう希望は残っていないのかもな」
空を仰ぐ是永に、長瀬は優しく言う。

「大丈夫ですよ、是永さん。僕がいます」

「えっ？」

「さっき、告白しました」

是永は、ゆっくりと横の長瀬を見下ろす。長瀬はにっこりとしていた。

「それで、OK、もらいました。刑務所から出たら、付き合おうって」

刑事は、くすつと笑う。

「刑務所じゃなくて少年院だけだな」

「ははっ、そうですか　それではバスが来ますので、そろそろ失礼します」

長瀬は立ち上がって一度礼をしてから、歩いて行った。

その力強い背中を眺めて、是永は背広のポケットからタバコの箱とライターを取り出して、タバコに火を付ける。

一服して、是永は空を仰いで、つぶやいた。

「やれやれ　、父親も大変だな」

青空には小さな灰色の小鳥が2匹、並んで飛んでいた。是永はそれを眺める。ふと、同じ種であろう大きな鳥が、その隣に並んだ。それを眺めて、父親は微笑した。

END

解決編 #2（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。また機会があれば、何やら書くかもしれません。その時まで、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4059n/>

学校の七不思議殺人事件

2010年10月8日14時02分発行